

---

# 僕の彼女は

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女は

### 【著者名】

Z2303E

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

まだ書いていない本編の番外編のような位置づけ。シンデレの女の子と、朴念仁の男の子の、何てことないラブストーリー。猫も出できます。

「 塙太のばか！ばかばかばか！」

乾いた音をたてて、皇月が塙太をひっぱたく。その反動で少しばかりよろめいた塙太は左右にたたらを踏んだ。それでも、涙を浮かべてきつとこちらを睨んだままの皇月に何かを言おうとしてドアに向かい、眼前で思い切りよく閉められたそれに鼻つ面をこれまた思い切りよくぶつける。いててと呻いて数歩下がると、そこには先程皇月が投げつけてきた毛抜きがあつて、そうとは知らずにその上に全体重をかけた塙太は悲鳴を上げる羽目になった。その拍子に体のバランスを今度こそ崩して壁に肩から斜めにぶつかると、その勢いで外れた額縁の角が脳天を直撃した。

「何やつてるの、塙太」

声も出せないほどの痛みの中で、視界がゆらゆらとゆれる。背後からかけられた声の方へやつと振り向くと、声の主はきらきらと艶めく黒い毛並みをこれ見よがしに輝かせて、じつと塙太が回復するのを待っていた。

「瑛里……」

「どこからどう見ても黒猫以外の何者でもないその生き物は、しかして流暢な日本語で塙太に話しかける。

「おれ、皇月怒らせちゃつたみたい」

「いつものことでしょう、それは」

「いや、今日はまじで酷かった。ほら見て、これ。ひっぱたく

のはもう慣れてきたにしてもさ、首筋嚙んだんだってば。超痛かつたよ、もつ……」

「首筋嚙まれるほど怒らせる塙太の気がしれないけどね、ボクは

つんとすました顔で、冷たくそう言い放たれると、塙太は途端に大人しくなった。

「何でこうなつちやうのかなあ」

そう呟いて、ずるずると衣擦れの音をたてながら壁にもたれるようへたりこんでしまうと、塙太はフローリングの床の木目をじつと見つめたまま黙りこくつてしまふ。その顔は十九歳とは思えないほどの哀愁をたたえていて、瑛里は聞こえない程度に一人ごちた。

「どうちもどうかだと思うけれど」

皐月が塙太の家に居候し始めてからかれこれ四年の歳月が経つ。皐月の母親が塙太の亡くなつた母親の親戚だとか何とかの縁で、塙太の家を頼つてきたらしい。

お世辞でも何でもなく事実として、皐月は天下無敵の美少女だ。それは生涯初の一目惚れを経験した塙太が保証する。ただ、彼女はただの美少女ではなかつた。

魔女だつた。

好きかもと思つたときには、彼女はもう魔女だつたのだ。受け止めるしか仕方あるまい。そもそも、皐月は皐月で魔女だとかはあんまり関係ない。と、塙太は思つていた。そんなわけで始まつた魔女

つことの『お付き合い』が平々凡々としているわけもなく、塙太の生活はそれから一変した。感情の起伏の激しい皐月による生傷の絶えない日々。マジシャンが使うマジックの如く使われる魔法によつて驚かされ続け、胃がきりきりとストレスで痛むことなどは日常茶飯事。何よりも、諾々と過ごしていた時間は皐月によつて色鮮やかなそれにとつて代わられた。

些細なことで皐月は怒る。それはもう、怒り狂う。そしてそれをとても正直に塙太にぶつけてくる。それはもう、一直線にぶつけてくる。

それでも、塙太は皐月が好きだ。それは容姿うんぬんの話ではもはやなくて、ただただ好きだ。でなければ、毛抜きを魔力で飛ばしてきて自分の眼球を狙うような女の子と誰が一緒に暮らすものか。

好きだ。その気持ちに嘘偽りなどない。なのに、皐月はたまにそれを信じない。今日みたいに。

塙太はそれが何故なのか、四年経つた今でもわからない。

「皐月？聞こえてる？」

何度もかに塙太が皐月の部屋をおそるおそるノックする。もちろん、今回も返事はなしだ。小さくため息をついて、そつとドアの前から離れる。未練がましく振り返りながら廊下を渡つて階下へと向かつた。

リビングルームでは無害なテレビががやがやと音を立てている。特別見たいわけでもなくて、ただつけてみただけのテレビ。

「 塙太！」

その無害で大人しいテレビ画面にっぽいに皐月の顔が写る。皐月は魔法を荒使いするところがある。セイも可愛らしいのだが。

ソファに座つて良かつた。

声に出さずに塙太は思つ。危つく腰を抜かしそうになつたから。

「 皐月」

「 あのね。あたし、すつづじに怒つてるの。わかる？」

氣付かないひとがいたら異常だと思つ。

「 う、うん。わかるよ」

「 じゃあ何であたしが怒つてるか言つてみなさいよ」

「 え、ええと、あれかな。おれが今朝牛乳をゴップに入れないので直にボトルから飲んだから、かな……」

「 違うーていうか、あんた、あたしがそんなみみっちいことで怒り狂うような女だと思ってるの？ 違うわよ。全然、違うーもっと重要なことなの！」

そんなみみっちい」と怒つたことがあるのは皐月なのに。

「 じゃあ…何だらひ…」

「 もういい！ 塙太にひとの気持ちを慮るよつた繊細さを要求したあたしが馬鹿だったのよーもういい！ー」

一方的に怒り、一方的に会話を中断、再開し、一方的に捨て台詞

を残す。実に皐月らしい。哲学者の田線で塙太は、もとの控えめな箱に戻つたテレビを見つめる。

「今日は何だか長引きそうだね

「うわあ！」

耳元で囁かれて、塙太は今度こそソファの上で軽くジャンプをする羽目になった。

「瑛里かあ。驚かさないでよ。足音くらいい立ててくれればいいのに」「それって、猫としての常識に反するんだけど」

しつと返してくる黒猫に苦笑で応ずる。それから、深い深いため息をついた。

「お手上げだよ、瑛里。なんなの？何がそんなに気にくわないの？もうね、全然わかんない。色々、手は尽くしたんだけどさ……」「色々って？」

「苺をね。皐月のお気に入りのハート型の皿に盛つて部屋の外においたんだ。ホイップクリームも忘れないでつけておいた。ほら、前にバタークリームでやっちゃったときは、カロリーと健康にも気が付かない男つて最低つて、怒鳴られたからさ。それから、イチゴミルクのショーケを急いで作つて部屋の外においた。ちゃんと、氷も入れてだよ？ぬるいショーケなんて、感じが悪すぎるつて皐月が言うからさ。それから、ええと、ブーツは全部磨いたでしょ、リンネンウォーターを使っておいた。あ、もちろん、皐月の好きなリネン類もアイロンをあてておいた。あ、もちろん、皐月の好きなリネンウォーターを使ってだよ。あとは、あ、香水入りのキャンドルも部屋の外に……」

「塙太」

器用に前足の一本の爪だけをによきりと出してみせて、瑛里はその漆黒の瞳に呆れの色を如実に表すと、

「ひとつ。皐月は何、キミの彼女なの？それともペツトなの？ふたつ。塙太は何、皐月の彼氏なの？それとも執事なの？」

「彼氏彼女だと思うんだけど…」

戸惑いつつも即答する塙太を見て、瑛里は塙太にも聞こえる声で一人ごちた。

「勘弁してよね」

塙太の母親は塙太がまだ小学生になるかならないかの頃に亡くなつた。だから、鮮明な記憶というのはあんまりない。だけどひとつだけはつきりと覚えていることがある。

『女の子には優しくしないとダメよ』

耳にたこが出来るくらいに、その言葉を聞いた覚えがある。それは、甘い呪いとなつて塙太を包み込んだ。時として度を越したレディーファーストは誤解を産む。何気なく接したつもりの相手に、塙太が彼女を好きなのだと誤解される。それはいつしか噂という形になつて皐月の耳に届く。いつも、そういうた噂は塙太のまったく計り知れないところで、皐月の方へと先に届くのだ。そして、皐月が泣く。しかも、怒る。塙太はその都度反省する。皐月の泣く顔なんて、本当は見ていたくないのだ。反省する。だけれど、どうやってそういう誤解を減らせばいいかが、いまいちわからない。

「最低だよ。もうね、最悪。塙太は元々頭の出来は良くないけど、そこまでだとは思わなかつた。ある意味、完璧だよ」

夜のリビングルーム。灯りに照らされて瞳孔が狭まつた猫科の瞳で睨みつけながら、苦々しい口調で瑛里が言う。さらさらりと酷いことを平氣で口にする猫に、塙太は曖昧な笑顔で、

「え、そんなんにだめ?」

どうやら皐月は何かに対しても相当鬱憤が溜まつてゐるらしい。そしてそれは塙太が気付いていないことらしい。それは何か。

「とにかく主義の瑛里とて、主人があのよつにへそを曲げていては寝床に戻りにくい。相談にのつてあげても良い、と居丈高に言った猫相手に、塙太は懸命に今までの経緯を話し始めた。

「いつ皐月が怒ったのか。どうやって怒ったのか。どうやって機嫌を直したのか。

Hペソードは尽きることもなく、小一時間も塙太は延々と皐月が怒った話をし続けていた。未だ終わりの見えない塙太の語りにしごれを切らした瑛里がストップをかけたところ。

「そんなに、だめ？」

確認するよう、聞く。その語尾は「によよよ」と口の中だけで呴かれるばかり。

「だめだね。そりや皐月も怒るよ。むしろボクには、何で塙太が今までのその数々の経験の中で学んでこなかったのかが理解不能」

「えええー……」

がつくりと頭を垂れてうなだれる哀れな塙太をすまし顔で見やると、瑛里は、

「ねえ。本当にわからないの？」

「何が？」

「皐月が怒るのはまあよつちゅうだし、あんな直情的な性格してるからすぐにかつかするけれど。でも、わからないかなあ？いつも皐月が塙太にああやつて怒りをぶつける時は決まった理由があると思うんだけど」

「本当に？」

「いや、だから。それを塙太が気付かないと、いつまでたっても同じだよ」

「そっか」

「気付かないとダメか。そういうば畢月もよくそのようなことを言う。鈍いとか気が利かないとか朴念」とか。

「」のままでは同じ」との繰り返し。瑛里の言つことよりもだ。おれが変わらなくては-。

決意に燃えた瞳をきつとあげて、塙太が瑛里を見つめる。お、と瑛里は片方のひげをぴくりとさせた。これはもしかするともしかして問題解決か、と。

「瑛里。おれ、変わるよ。もつ同じ」とで畢月を怒らせたりしない

い

「うん。そうだね」

瑛里が満足そうに尻尾をくねらせる。やれやれ。これで今日は安眠出来そうだ。

「何に気付けばいいのか、教えてくれないかな」

真面目にそつぱなく塙太を、瑛里はしばし見つめ返して、ややあつてからゆるりと首を振る。

「もうね。全然駄目」

皐月の好きな食べ物ならいっくらでも挙げられる。皐月の好きな色、好きな匂い、好きな作家にテレビに漫画に音楽、何だつて挙げられる。

何でもわかつてゐる。と傲慢になるつもりは塙太にはまったくない。と、いうのもひとつわからないことがあるからだ。

皐月は好き嫌いが非常にはつきりしている。感情表現も非常にわかりやすいものを好む。一人の間の距離をぐんと縮めたのも、最初に手をつないできたのも、皐月だ。キスを最初にしたのだって皐月からだつた。大好き！とは皐月の口癖だが、塙太にはそれがどうにもよくわからない。

「なんで、皐月はおれのことを好きなんだう？って。思つときがあるんだよね。別に自分を卑下するつもりなんてないんだけど、何でおれなんだうーって。たまにね」

ため息をつくのすらも無駄に思えてきて、瑛里はふんと鼻息をもらした。ついでに口を開く。

「まあ、今みたいなことを不思議に思つてゐる時点で、塙太はだめだめ人間確定だよね」

「ええー、厳しいなあ瑛里は」

苦笑して後ろ頭を搔く塙太に、

「いや、真剣にそういう思つよ、ボクは」とじめをくわえてやる。

その聲音があまりにも淡々としていたので、塙太は上目遣いをするようにテーブルの上にきちんと座つてこちらを見つめ返している黒猫を見やつた。丸い大きな瞳に、不安そうな自分が映つてゐる。

「おれって……」

「またそれ？おれは、おれって、おれも、おれが、おれおれおれ。塙太は何だかんだ言って、自分のことしか考えてない。見えてない。皐月はどうしたの？どうして行つちゃつたの？」

瑛里にしては珍しく苛立つた声でそう問い合わせられて、塙太はしばりもどりに、

「皐月は……皐月は……」

言いかけて、やめる。なに、と小さく瑛里が続きを促した。一度目を瞑つてから、息を大きく吸つ。そして、

「皐月は、いつでも中心にいるよ。何してたって、どうにいったって、おれの軸は皐月だから。皐月と出逢つたときから」

思ひがけず熱い塙太の心の内を田の当たりにして、今度は瑛里が黙る番だ。しかし一瞬のあとに、いつものペースを取り戻すと、にやりと笑つた。

「それ、皐月が聞いたら、どうするかな」「ええ！」

顔を真つ赤にする。皐月が今のを聞いたら。それはありえない。といつも、ありえないで欲しい。だつて恥ずかしいではないか。愛の告白なんて。そんな。皐月じゃないんだから。みんながみんな、皐月のように素直に表現出来るわけではないのだ。少なくとも、塙太には難しい質問だ。

「だだ、だめだよ！」こんなのが聞かせられないでしょ。絶対、だめ

「塙太さあ」

言しながら、せりりと前足を出して歩き出す。長い尻尾は催眠術師の「メインのようこくこやくこやりと塙太の眼前を揺れる。

「皐月に、一度でも好きって言った?」

「……」

答えよつとして踏みどどまる。言つた。と思つ。でも、本当に?四年間分の思い出をダイジヒストで頭の中で再生する。高速再生。見当たらなかつた。妙だけじ、見当たらなかつた。その事実に愕然とする。心の中では何万回と畳えているつてこいつの。こいつ。

言つてないのか。おれは。それつて、最悪じやないか?失礼つていうか、わかりにくいつていうか…。不安になるのは皐月の方かもなあ…。皐月じやなくとも怒るかも!

「言つて、ないかも…」

「言つてあげないの?」

言葉と共に、瑛里がもう一度、尻尾を揺らす。それを合図にして、塙太がソファから立ち上がつた。ばたばたと慌ただしい足音をたてて、一階へと急いで行く。

「手間がかかるつたら」

「皐月！」

ノックも忘れて皐月の部屋に入ってしまったことに気付いて、ごめん！とまた小さく叫んで、一旦部屋の外に出る。いつもならここに殴り倒されてもおかしくないのだ。皐月は自分の部屋に無断に入られるのを嫌う。コソコソ、と素早く一回ノックをしてから、もう一度部屋のドアを押し開けた。

「あれ？」

さつきは急いでいたので見えなかつたらしい。皐月の部屋はその主を欠いていた。あちらこちらに散乱するぬいぐるみや筆記用具やら服やら本やらその他の小物やらが、皐月の苛立ちを如実に語つていて、一瞬塙太は絶句する。が、すぐに気を取り直して階下へと急ぐ。

じぐるを巻くような格好でソファの上でうつらうつらとしている瑛里に、

「皐月、いなかつた！」

必要以上の大声で報告する。

「じゃあ探しなよ」

眠りの邪魔をされて、不快感を露わに返つてきた瑛里の言葉に、

「言われなくても探しに行くよ」

答えた。

好きなもの。嫌いなもの。怖いもの。嬉しくなるもの。たまに好きでたまに大嫌いなもの。興味はあるけどそこまでは好きじゃない

もの。バラエティに富んだ好き嫌いを皐月は持っている。嫌いになることなんて殆どない塙太にとっては、それすらも新鮮だ。

イライラして、とりあえず部屋のものに当たり散らしてみたけど、まだ気分が收まらないから外に出た。そんなところだらうか。

庭用のサンダルをつっかけただけで外に飛び出した。走りにくいことに気付く。空気が肌寒い。もうそろそろ秋なのか。そんなことにようやく気付く。

まずはコンビニ。家からたつたの五分で着ける間に、皐月は来るはず。それとももう来たあとか。

いない。

いまだに両田とも一・五の自慢の視力で皐月が店内にいないことを確かめると、迷わずに引き返す。そして、ひとつめのコーナーを右に曲がる。あとはまっすぐ。

カンカンと木製のサンダルが音を立てる。何かに似てる。ああ、あれか。踏切だ。カンカンカンカン。踏切が閉まってしまえば、もう渡れない。遅れてしまえば、もうそれっきり。それっきり。悲愴感漂うような自分の思考に、塙太はふ、と笑みをもらした。

まつたくもう。

出逢ったときからそうだったのだ。皐月だけが、塙太を焦らせ、追い詰め、焦らして急がせる。マイペースだと自覚している自分の性格では考えられないことだ。本当に。そこに疑問なんて挟むべきじゃなかつた。何で好きなんだろうとか。いつまで好きなんだろうとか。そんなことをしている暇があるなら、もっと皐月に答えれば良かったのだ。間に合わないかもしれない。でも、待っててくれて

いる気がする。それを確かめなければ。そして、皐月に伝えなければ。

息が切れてくる。こんなに全力疾走したのは、どれくらいぶりだろ？ だけど、あと少し。あと、もう少し。

コンクリートで出来た階段を一段飛ばしに上がつて、塙太は目的地に着いた。

何故かはわからない。だけど、皐月はいつもここに来る。何か嫌なことがあるたびに、もつと言えば塙太とけんかをするたびにここにくる。この、家からほどよく近い児童公園に。

「……は、はあっ……、皐月……」

息も切れ切れに呟いて、塙太は額の汗を上着の袖で拭き取った。

「塙太……」

「こころなしか驚いてみえる皐月の顔が、ぼんやりとしたオレンジ色の街灯に照らされる。ブランコに座つたまま、微動だにしない。その瞳だけが、じつと塙太を見つめていた。息を整えながら一歩ずつ近付いていく塙太を、じつと見つめる。

そういえば、ここに来るたびにいつも皐月はブランコに乗つている。それにも意味があつたりして。

そんなおちゃらけたことを思いつゝ間に、塙太は皐月の目の前に立っていた。

「なに

普段よりかはか細い声で、こちらを見上げる。大きな瞳はまっすぐここちらを見つめ、口唇は少しだけへの字に結ばれている。それを見て、その愛くるしさを見て、思わず塙太の顔がほころんだ。

「なにー。」

攻撃的にもう一度、皐月が口を開く。

「うん」

満面の笑みで塙太は頷く。

「なんなのよー。」

皐月は気が短い。

さらに笑みの広がった顔をどつこにも出来ずに、そのまま、塙太はそれを口にした。

「うん。あのね、皐月。おれ、皐月が好きだ

「……は？」

両眉をアーチのように上げて、口をきれいなOの形に開けて、皐月がそう言つのを塙太は見つめた。

「いま、なんて……？」

「好きだ」

「なに、急に」

「うーん。急じゃなくて、どっちかっていうと遅れてるんだろ？  
おれ。ごめん、気付かなくて」

「なに言つてんの。なに、気付かないって…」

「いやだから、好きって言つてなかつたなあと思つて」

「だから今言つの？」

「うー、うん。そうなるか。いや、おれはずつと好きだつたよ」

「でも、言つてないつていうのは、今日まで気付かなかつたんだ？」

「う、うん…。恥ずかしながら…でも、皐月。おれ、皐月に出逢つたときから、皐月のこと、大好きだから」

どんどんと俯いていつてしまつ皐月を不安げに見つめる。遅かつた、かな。やつぱり。ブランコの方に上半身を屈めて、そつと皐月の名を呼んでみる。

「塙太のばか！遅いのよ、とろいのよ、いちじちー！」

言いながら皐月が抱きついてきた。突然のことに皐月を支えきれず、塙太は足をすべらせてその場に仰向けに倒れ込む。皐月を首に巻き付けたまま。

「大好き！」

公園の砂でしたたかに打つた後頭部がじーんじーんと嫌な周波数を頭の内部で奏でる。それでも、皐月のその言葉は塙太を幸せにする。へら、と笑いかけて、皐月の髪をなでてやる。

「うん」

「うんじやないでしょ！」

がばりと胸に埋めていた顔を皐月が上げる。

「え？」

言葉に頼らずに、それよりも遙かに雄弁な眼光でもつて答えてくれる皐月を見て、塙太はその言わんとすることを悟つた。

「あ、おれも、好きだ、よ？」

「何でそんなに消極的なの！」

「いや、消極的とか、そういうわけではなくてさ。そういう回も聞かれると、ちよつと恥ずかしいっていうか。強制的に言わされてもつていうか」

「何で！強制的じゃないもん。自分の気持ちに恥ずかしいも何もないでしょ。それとも、塙太はあたしのことを恥ずかしいとも思つてゐる、あたしが魔女だから！」

「ああ、全然違う！違つ方向に行こうとするよ、臥月…」

慌てて両肘を軸に上半身を起しつゝ、臥月と向かい合つた。いつん、と自分の額を彼女の額にくつつけて、

「おれは、臥月が好きなんだ。関係ないよ、魔女だと何だとかは？」

「ほんとうに…？」

口唇をとんがらせて、臥月が尚も問つ。その仕草がまるで幼子のよつで、塙太はふつと吹き出した。そして、子供に言い聞かせる保育士の口調で、

「ほんとうに…？」

下唇を前歯で軽く噛んで笑む。それは臥月の、満足のいったときの顔だ。それに安堵して塙太は視線を動かそうとして、かたわらのブランケットをやつた。

「臥月さあ」

「なに？」

「ブラン」「好きなの？」

「は？ 好きだけど、なんで？」

「いや、おれとけんかするとさ、よくこの公園でブランに乗つてるじゃん。そんなに好きなのかなと思つてさ」

「塙太のばか！」

怒声とともに頭突きを見舞わされた。目の奥がちかちかする。

「え、ちょっと、皐月、さん…？」

「この公園は！ あたしと塙太が初めて出逢つた場所－このブラン

「は、あたしが塙太に出逢つたときに乗つてたの！」

「あ、そういえば……」

「そういえばあ？」

ドスのきいた声で言つと、皐月はぴょんと立ち上がりてしまつ。もういい！ と口早に言つのが聞こえた。

足早に去つてしまふかと思えば、汚れてもいの自分スカートをぱたぱたとはたいてちらちらと塙太の方を気にする。塙太が立ち上がると、ようやく皐月は公園の出口に向かつて歩き始めた。その足取りは、足早に行つては不自然に止まり、また急に歩き始めるという、何ともわかりやすいもの。まったく。自分の鈍感さにも呆れるな。塙太が皐月の背中に声をかける。

「わーつき」

「なによ」

「おれ、ブラン」「好きだよ」

「なにそれ」

「今、好きになつた」

皐月は足を止めて、数秒じつとしていた。何度か足を前に出そう

とじては踏み出せず、そのうち顔をうなだれたまま、塙太の方に歩みよってくる。

「あのね。言つておくけど…。」

居丈高な口ぶりで人差し指を塙太の目の前につきつけると、皐月は、

「塙太は！これからもずっと、あたし以上にあたしのこと好きでいないと、だめなんだからね」無茶苦茶なことを言い出す。

それに優しく微笑み返す。ゆっくり、つきつけられた人差し指を手の平にしまって、かわりに小指を出させる。それに自分の小指をからませると、

「うん。約束な」

「ほんっ…」と音がしそうな勢いで皐月の顔が茹でタコのよくなつた。もともと色が白いので、余計に赤くみえる。

「」によじによじと何か口の中で呟く皐月の肩を抱き寄せて、その髪に口づける。そして額に。きつく閉じられたまぶたに。鼻の頭に。頬に。それから、その口唇に。

「やれやれ」

公園の階段を上ったすぐのところに鎮座している瑛里の姿を見つけて、塙太は微笑んだ。

皐月は好き嫌いが激しい。皐月は感情表現が素直で大胆で、なに時として妙にあのじやくになる。わがままになつたり気弱になつたり、泣いたり笑つたり、太陽のようで月のようで。たまに思つたりもする。自分に振り回されて、疲れないので。たまに自分を嫌つてみたり、世界を呪つてみたり。そんな自分に嫌悪感を抱いて泣き出したり。花の香りに一喜一憂。雲の動きに笑い出して、雨の気配に怯える。母が大好きでピンクが大好きで、部屋の整理整頓が何より苦手。皐月の毎日は忙しそうだ。

そんな皐月の傍におれはいる。ずっといる。

そして、そんな皐月がおれは好きだ。大好きだ。

きつとずつと。

「ほらほら、行くよ、塙太」

「うん」

肩の上に瑛里をのせて、皐月が塙太に向かつておいでおいでする。

塙太が皐月の手を握ろうとしたまさにそのとき、皐月はその可憐な首を傾げると、まつたく何でもないといった風に、

「あ、そうだ。塙太さ、牛乳をボトルから飲んだりするのやめよね」

怒つてたんじやん。やつぱり。

苦笑しながら見上げた月はまんまる。

「じめんじめん」

そつと皐月の手に自分のをからませた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2303e/>

---

僕の彼女は

2010年10月9日19時19分発行